

## 第3章

### 中学・高校生における感情表出の制御の発達的变化

### 第3章 中学・高校生における感情表出の制御の発達的变化

第3章では、研究2で作成された感情表出の制御尺度を用いて、中学1年生から高校3年生までの感情表出の制御の発達的变化について検討する。現代の青少年がどのような感情表出の制御をどれくらい多く行っているのか、また性差はあるのかについて調べることによって、現代の青年の感情表出の制御の態様を明らかにする。

## 第1節 感情表出の制御の学年的変化〔研究3〕

### 目的

一般に日本の社会的場においては、個人よりもその場全体の在り方や一体感が優先される傾向がある。個の自我の確立が課題となる青年にとっては、社会と面したとき、個を生かしながら、いかに「場の倫理」と折りあいをつけるかが重要な課題となる。

このような社会スキルが要求されてはいるものの、青年期は「自分が感じる自分の姿よりは、他人の眼に映った自分の姿」に対し心を奪われる状態が生起しやすく、自分と他者（集団）との間のバランスを保つことは容易なことではない。自分が他者にどう思われるかがすごく気になる青年は自分を他者に受け入れてもらいやすい形で表わすことが多いであろう。特に近年、青少年の対人関係の変貌を指摘する声が高く、傷つくのを恐れるがゆえに人間関係に深く関与することを避ける現代青少年像が描かれている。こういう現状を考えると、その場限りの付き合い方を多く行い、真剣に何き合うことによってお互いを理解しようとする努力はあまりなされていないとも言えよう。こういう現代青年の特徴は、友人との関係においてさえもお互いに感情表出の制御を多く行うことを示唆する内容である。現代青年の様子を感情表出の制御という側面から発達的にとらえることによって、青年の現状と心の理解の一助になることが期待される。

本研究では 青年期の感情表出の制御の様子を中学校時期から高等学校時期にかけて発達的に検討することを目的とする。

### 方法

**被調査者** 首都圏の公立中学校5校 1年生470名(男子233名, 女子237名), 2年生328名(男子171名, 女子157名), 3年生346名(男子185名, 女子161名), 首都圏の公立高等学校3校 1年生515名(男子253名, 女子262名), 2年生462名(男子227名, 女子235名), 3年生482名(男子223名, 女子259名)。これらの高校の学力のレベルは「中の上」と思われる。

**調査内容** 感情表出の制御尺度—研究2で作成したものを使用。

**調査方法** 各学級でHRの時間または授業時間に一斉に行われた。しかし、一部の学校に対しては、授業時間などの都合で、自宅に持ち帰って次の日に回収するという形で行った。

### 結果と考察

感情表出の制御の全体および各下位尺度ごとに学年×性の2要因分散分析を行った。なお、本研究の多重比較には、すべてLSD法が用いられた。その結果、Table3-1に示されているように、第1因子の「八方美人的制御」において学年と性の交互作用 ( $F(5,2482)=2.66$   $p<.05$ ) が認められた。次に、第2因子の「非仲間志向的制御」(学年: ( $F(5,2482)=8.02$   $p<.001$ ), 性: ( $F(1,2482)=62.49$   $p<.001$ )), 第3因子の「自己抑圧的制御」(学年: ( $F(5,2482)=3.21$   $p<.01$ ), 性: ( $F(1,2482)=45.46$   $p<.001$ )), 第4因子の「同調のための抑制的制御」(学年: ( $F(5,2482)=4.50$   $p<.001$ ), 性: ( $F(1,2482)=23.67$   $p<.001$ )) においては学年および性の主効果が認められた。第5因子「同調のための強調的制御」においては学年の主効果のみが有意であった(学年: ( $F(5,2482)=10.16$   $p<.001$ ))。

Table 3-1 中高生の学年別・性別の感情表出の制御得点の平均(SD)および分散分析結果

	中						高						分散分析			学年差	性差
	1年		2年		3年		1年		2年		3年		学年差	性差	交互作用		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女					
第1因子	16.31 (5.04)	17.12 (5.00)	16.04 (5.06)	17.86 (5.05)	16.86 (5.12)	15.99 (4.71)	15.86 (4.92)	17.00 (4.68)	16.26 (4.94)	17.09 (4.24)	15.94 (4.95)	16.19	1.76	11.81 **	2.66	男高1<男中3,女(高1.2,中1.2) 男(中2・高3),女中3<女(高1.2,中1.2) 女高3<女(高2,中1.2) 男(中1・高2)<女中2	
第2因子	10.69 (4.17)	10.09 (4.12)	10.75 (3.71)	9.90 (4.09)	10.84 (4.33)	9.55 (3.53)	9.84 (3.60)	8.60 (3.13)	10.16 (4.03)	8.67 (3.12)	10.34 (4.08)	8.60 (3.51)	8.02 ***	62.49 ***	1.46	(高1.2.3)<(中3.2) 男>女	
第3因子	10.88 (3.92)	12.25 (4.21)	11.23 (3.51)	12.71 (4.57)	11.73 (4.07)	12.15 (3.95)	11.95 (3.74)	12.82 (4.17)	11.80 (4.08)	12.96 (4.10)	11.79 (3.91)	12.94 (3.97)	3.21 **	45.46 ***	0.98	中1<(高1.2.3) 男<女	
第4因子	10.88 (3.76)	10.16 (3.78)	10.71 (3.50)	10.12 (3.94)	10.72 (3.68)	9.45 (3.10)	9.84 (3.19)	9.49 (3.35)	9.96 (3.40)	9.52 (3.04)	10.29 (3.63)	9.40 (3.10)	4.50 ***	23.67 ***	0.66	高1<中3 (高1.2.3)<(中1.2) 男>女 (高2.3)<中3 (高1.2.3)<中1 (高1.2.3,中1)<中2	
第5因子	4.53 (2.26)	4.79 (2.21)	4.68 (2.21)	4.87 (2.36)	4.52 (2.33)	4.34 (1.95)	4.23 (2.04)	4.21 (1.95)	4.01 (1.95)	3.96 (1.70)	4.00 (2.00)	4.02 (1.97)	10.16 ***	0.25	0.68		
全体	53.14 (13.64)	54.39 (13.63)	53.38 (13.07)	55.53 (14.58)	54.52 (14.47)	51.51 (11.45)	51.67 (12.17)	52.07 (11.34)	52.22 (12.06)	52.15 (10.32)	52.39 (12.59)	51.14 (11.72)	3.05 **	0.02	1.86 †		

註1) 各因子は、実際は下位尺度であるが、便宜上このように表記する。第1因子「八方美人的制御」、第2因子「非仲間志向的制御」、第3因子「自己抑圧的制御」、第4因子「同調のための抑制的制御」、第5因子「同調のための強調的制御」。

2) † p<.10, \*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

まず、性差においては第2因子と第4因子で男子が女子より感情表出の制御を多く行い、第3因子で女子が男子より感情表出の制御を多く行うことが示された。すなわち、友達に対するネガティブ感情は強く、ポジティブ感情は抑制して表す「非仲間志向的制御」（第2因子）や友達に同調するために自分のネガティブおよびポジティブ感情を抑制して表す「同調のための抑制的制御」（第4因子）は男子が多く行い、友達に対するネガティブ感情を抑制して表わす「自己抑圧的制御」（第3因子）は女子が多く行うという結果であった。

性差についての結果をまとめると、女子はやりとりの相手の友達に対するネガティブ感情は表現しないようにする傾向が強いことが示された。一方、男子は友達に対してポジティブな表出をしないようにすることや、友達と同じ感情を共有し仲間意識を強く感じようとしており、何かについて自分だけが感じている感情は、ポジティブであれネガティブであれ表さないようにする傾向が強いということが示された。

次に、学年差においては、第2, 4, 5因子で中学生の方が高校生より、また第5因子においては、中学生のなかでも2年生が感情表出の制御を多く行うという結果であった。また、第3因子では高校生が中学1年生より感情表出の制御を多く行うという結果であった。

すなわち、第4因子の「同調のための抑制的制御」と第5因子の「同調のための強調的制御」は友人の中に生じた感情に対し抑制したり強調したりすることによる同調で、友人と同じ感情を共有しようとする傾向が中学生の方が強いことを表している。第2因子は友達に対して感じているポジティブ感情を抑制し、それほど感じていないネガティブ感情を強めて表すことで、結局友人関係において常にネガティブ感情を表す感情表出の制御パターンである。これに対し、第3因子は友達に対するネガティブ感情を抑制すること

で友人関係を保とうとする制御パターンである。

学年差についての結果をまとめると、中学生の方が高校生より、友人関係をスムーズに運ぶのにあまり有効ではないと思われる「非仲間志向的制御」と、仲間と連帯し同じ感情を共有しようとする様子がうかがえる同調による制御を多く行うことが示された。

最後に、交互作用が見られた第1因子の「八方美人的制御」においては、女子中学2年生が最も感情表出の制御を多く行うという結果であり、Fig.3-1からも示されているように、女子中学生の場合、2年の時に非常に感情表出の制御を多く行い、3年になるとそれが急激に減るという結果であった。また、中学2年生の女子は感情表出の制御全体や各下位尺度において、全般的に高い感情表出の制御得点がみられる。

三浦・坂野（1996）によると、中学2年生は部活動中心の生活となりストレスフルな状態であり、女子は男子に比べ、友人関係が自分にとって影響力のある部分であると評価している。管・上地（1996）は高校生を対象とした研究で、「友人との関係においては、一般的に女子は自分一人が孤立することに対する恐れがあり、自分は友人にどう思われているのだろうか、友人の反応を通して自分を観る傾向があり、友人に認知されていると感じることができれば、安心できる」と述べている。これらのことを考えると女子中学2年は部活動などの社会的場面が学校生活の重要な部分になり、その中での人間関係を重要視しているため、人間関係に気を使い、相手に合わせて感情を抑制したり強めたりして同調をたくさん行い、また、友人に対するネガティブ感情なども表せないことと思われる。

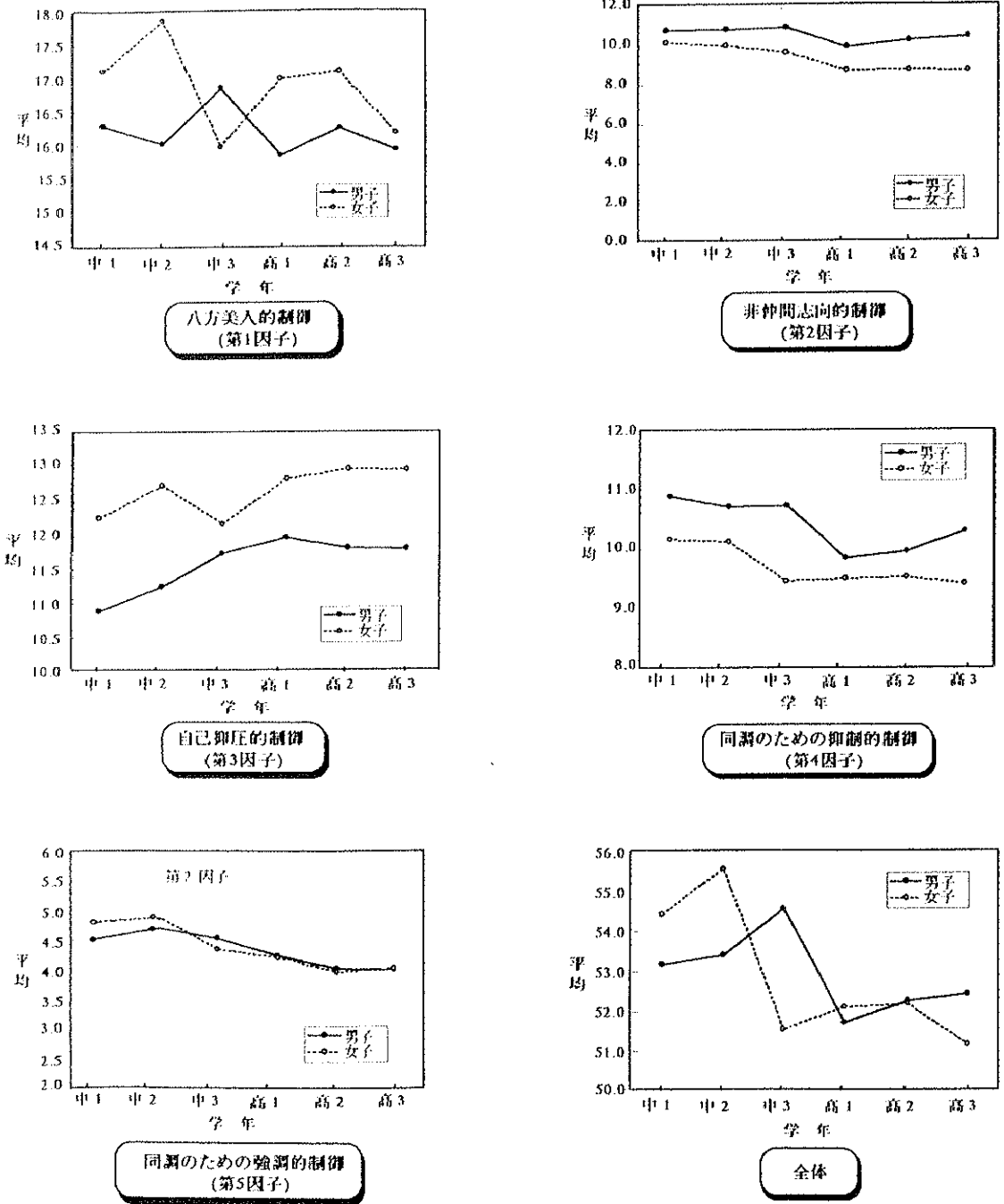


Figure 3-1 感情表出の制御の各下位尺度得点の性別学年的変化



## 第2節 第3章のまとめ

第3章では、中学生から高校生までの感情表出の制御の学年的変化（中学1年～高校3年生）を検討した結果、感情表出の制御の下位尺度別に学年的変化が明らかにされた。学年的変化が見られたところにおいては、大体中学生と高校生の学校段階別に差が見られた。中学2年の女子は全般的に感情表出の制御を多く行うという特徴が見られた。

なお、性差においては「非仲間志向的制御」と「同調のための抑制的制御」で男子が女子より感情表出の制御を多く行い、「自己抑圧的制御」で女子が男子より感情表出の制御を多く行うことが明らかにされた。また、学校段階差においては、中学生の方が「非仲間志向的制御」、「同調のための抑制的制御」および「同調のための強調的制御」を多く行うことが明らかにされた。